

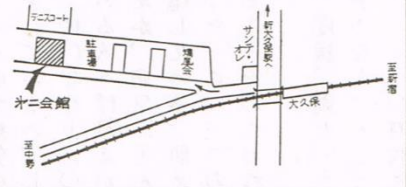
ろば



百人町教会

集会案内

礼拝： 毎日 午前10時半
 於 矯風会第二会館
 聖書研究会： 第1・第3木曜
 午後7時
 於 阿蘇宅
 連絡先： 168 東京都杉並区高井戸西
 1-18-8 阿蘇敏文
 (03-333-5002)



- ① 羽生伝道所開設決議（11月・臨時総会で親教会として百人町教会出身の野毛一起牧師を支援することを決議）
- ② 斉藤留美子・溝口伸両氏の受洗
- ③ ろばの家オープン（高瀬浩之夫婦が里親をしているが、聖書研究会のメンバーが中心になって協力体勢を組織して新しい家を購入。四人目の里子も迎えた。）
- ④ 鄭聖泰氏帰国（ソウルの姉妹教会からの初の留学生であり、百人町に韓国語講座を開設した。）
- ⑤ 北支区の合同クリスマスに百人町教会聖歌隊として参加（支区活動に積極的に参加）
- ⑥ 出身教職以外の牧師を招待（年一回、出身教職を招待しているが、今回、遠野教会の大田春夫牧師をお迎えして礼拝、地方教会から学ぶ姿勢と体勢の確立へ前進）
- ⑦ 第四回、日韓姉妹教会合同修養会（ソウルで開かれ、百人町の神崎恭子氏韓国語で発題）
- ⑧ クリスマス礼拝の中で韓国語讃美歌を全員で歌う（礼拝参加者に留学生二家族あり）
- ⑨ 趙英信氏帰国（留学生で日本に来ていて百人町教会に出席するようになり、韓国語中級クラスの講師奉仕。帰国後、姉妹教会に紹介出席してクリスマスに受洗）
- ⑩ キムチ講習会始まる（姉妹教会からの留学

一九八六年 百人町教会十大ニュース

生趙容來氏夫人、鄭聖教氏が講師、キムチ及び韓国料理を学ぶ会）
 十大ニュースに入れるべきことが多々ある。農村伝道神学校を卒業した田中利三郎氏を七人目の牧師として三重県上野教会に送り出す。その他出身教職者たちの移動の多い年だった。大庭昭博牧師は婚約とドイツ留学、三浦栄牧師は角田教会から碧南教会へ赴任、佐伯博正牧師は岡山教会から学生キリスト教友愛会主事として来京。池田春善牧師結婚。
 韓国語中級クラス三人目の講師宋熹永氏家族帰国等々、更に個人的な重大ニュースもたくさんあった。
 姉妹教会関係の出来事が半分を占めるといふことは、如何に多くを我々が受けていることかを知るのだが、他方、蚕室中央教会は百人町教会からどれだけのものを得ているだろうかと思う。しかし、我々はT A K E & G I V Eの利害関係ではなく、主にある姉妹教会関係である。

八十年代後半、日本の精神状況は「ビョーキ」や「元氣」を装いつつ、痴呆状態を進行させている。その結果、ある方向の大きなうねりの中に巻き込んで連れていかうとしていく。凧ぎのようにしか見えない時代精神の中に「妖怪」が日本全体を飲み込もうとしている。「真理の帯を腰にしめ、正義の胸当を胸につけ、平和の福音の備えを足にはき、信仰のたてを手に取り、救いのかぶとをかぶり、御霊の剣を取れ」との命令を聞こう。

出来事となる福音

木田 献一

弟子たちはパンを持って来るのを忘れていたので、舟の中にはパン一つしか持ち合わせがなかった。そのとき、イエスは彼らを戒めて、「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とを、よくよく警戒せよ」と言われた。弟子たちは、これは自分たちがパンを持っていないためであろうと互に論じ合った。

(マルコによる福音書八・一四―一六)

福音書の物語には、イエスが飢えている群衆を養われた話と、病気の人々を癒された話が多く見られる。これはイエスが活動された状況を理解する上で非常に重要なことである。われわれは現在、飽食しているので飢えの問題の痛切さを実感することがない。また医療の設備や保険の制度も整っているので病気の問題についても大した心配をしていない。しかし昔はそうではなかった。四〇年余り前の戦中や戦後のことを知っている人々は飢えがどんなに切実な問題であったか、病気がどんなに人々を苦しめたかを記憶している。飢えと病気の背後には戦争があった。この三つの苦しみは不可分のものであることをわれわれは認識しなければならぬ。

旧約聖書を読むと、飢え、疫病、剣という三つのことが神の審判の代表的なものとして繰り返し言及されている。イエスの時代に

も、これらのことは全く切実な問題であった。紀元前六三年、すでにユダヤはローマの属領となっていた。その後ヘロデがローマの元老院の承認の下にユダヤの王となった。この権力主義的な王の晩年とイエスの誕生は重なり合っている。イエスが活動した時期は、ピラトがローマのユダヤ総督として支配していた。要するに、イエスの時代にユダヤはローマの占領下に置かれていたのであり、直接ローマが支配権を行使しない場合にも、ヘロデを始め土着の暴君たちが民衆の苦しみを意に介することなく権力を振っていたのである。民衆の悲惨は深刻なものであったはずである。福音書自体には、それほど戦争のことは出てこないが、病気と飢えの問題は何度でも出てくる。ローマの占領下に民衆は人間として生きる権利を殆んど認められていなかったと言っている。

この状況の中で、イエスの神の国の福音は民衆に生きる権利を確認するだけでなく、神の支配の下に新しい歴史を創り出すのは、この世の不当な権力の下に抑圧されている民衆に外ならないということを示している。イエスの言葉には、この世の権力に最後の審判を告知する権威と力があった。その力は病いに苦しむ人々にも、新しい力をもって立ち上る勇氣を与えることができた。またあらゆるものを収奪されて絶えざる飢えにさらされている人々に、敢えて持てる物をお互いの間に分かち合っただけで誰一人飢えのゆえに倒れることのないよう

助け合う精神を呼び起すことができた。これがイエスの伝道に伴なう病気の癒しと群衆を養う奇蹟物語の意味である。イエスの福音は決して単なる言葉に止まるものではなく、常にこのような出来事となる力を備えていた。出来事となる福音は、この世の支配者たちを恐れさせた。彼らはイエスを十字架にかけて殺してしまつたが、イエスの福音の力はその死によつて失われることはなく、むしろより大きな力をもって、イエスを主とする神の国の力が明らかにされ、その結果、神の支配の下にキリストの体としての教会が生まれ出たと言ふことができよう。しかし教会がある程度この世的な意味でも確立して来ると、弟子たちの信仰はイエスの宣教が持っていた出来事となる福音の力を失い始めた。

福音書の中で舟に乗っている弟子達の姿は大低、後の教会の状態を指している。マルコによる福音書のこの箇所でも、彼らは舟の中でパンが一つしかないことに気付いて論じ合ったことが記されている。彼らはイエスのように神の国の福音によつてのみ宣教の活動をしようとするのではなく、舟に積み込んだ僅かのパンをあてにして、自分たちのなまじうることを考えようとする。

イエスは彼らに向かつて、「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とをよくよく警戒せよ」と戒めておられる。神の国の福音は、出来事として具体的を救いをもたらすが、教会の僅かの持ち物を基礎とする営みは、パリサイ人のような戒律的宗教を生み出すか、ヘロデのように、この世の組織の一つとして生き

て行くために、教会にすら権力指向の態度を取らせるようになってします。イエスのこの言葉は、初代の教会の中に、戒律的宗教に硬化して行く傾向とか、政治主義的姿勢に傾く危険が強く意識されていたことを示すものであろう。そしてこの危険は確かに重い困難な課題として存在していたであろう。

このような危険とそれを克服する課題は決して過去の問題ではない。正に現代のわれわれの問題である。飽食の時代であって、われわれの信仰は貧しく小さい。日本の内にも外にも大きな大きな問題がある。日本はアジアの国々に対して、イエスの時代におけるローマのような役割を演じている。日本はアジアの人々の飢えと病気の原因である。日本の教会は大きな問題に直面しているが、神の国の福音によって生きようとはしていない。そうではなく、舟の中にある僅かのパンの量について論ずるばかりである。

今アジアの教会では、神の国の福音のゆえに、不正な権力者に抗して民衆の生きる権利を回復し、民衆こそ新しい歴史を切り拓く主体であることを明らかにする運動が起っている。われわれはそのような出来事を韓国にも、台湾にも、フィリピンにも見ることができよう。正に飽食しているがゆえに、舟の中に持っているパンの数にとらわれている日本の教会に対して、イエスの叱咤の声が聞こえて来るように思われる。「なぜ、パンがないからだと論じているのか。まだわからないのか、悟らないのか。あなたがたの心は鈍くなっているのか。目があっても見えないのか。耳が

あっても聞こえないのか。また思い出さないのであるか」。(マルコ八・一七—一八)。アジアの教会は日本の教会に向かつて、このイエスの言葉を投げかけているようにも思われる。しかし、われわれの間にも、このイエスの言葉を聞いて、パンは持つていないが、神の国の福音のゆえに行動する人々が全くいないのではない。フィリピンの友人に出会って、ミンダナオに出かけ、フィリピンの人々と一緒に教会の仕事をしている女性がいます。

昨年、われわれの仲間が『ろばの家』というファミリー・ホームを発足させた。別にそのための資金があつたわけではない。神の国を信ずる信仰が出来事となつて『ろばの家』が生まれたとでも言う外ないようなことであつた。今年野毛さんが羽生で伝道所を発足させるといふ。野毛さんの話を聞いてみると、神の国の福音が聞こえる方に行つて見る外し方がないというだけのことである。野毛さんも別に明日のためのパンを蓄わえているわけではない。神の国の福音を信ずるところでは、必ずパンが与えられると信じているだけのことである。

『羽生から』という羽生伝道所開設に向けての機関紙の一号に野毛さんは、次のようなことを書いています。自分はキリスト者が「隣り人を愛する」と言うような言い方に耐えられない。特に「隣り人を」というときの「を」の響きがいやだと言う。隣り人になにかをしてあげるといふ発想、それは舟の中のパンの量を論じ合う姿勢と結びついている。そのような姿勢は、出来事となる福音とは無縁のも

のである。

『ろばの家』の会報六号に、小学校一年生のゆう子ちゃんが、あさがおのはち植えをかかえて、ろばの家に来たことが記されている。ゆう子ちゃんは「あさがおの花が咲くまでおとまりしていたいナー」、「あさがおの種ができるまでずっといたいナー」と言つたので、私たちの願いが叶つて九月一日からろばの家の住人になりましたと報告されている。この文章で、ゆう子ちゃんのこと何時も、主格で記されている。一度もゆう子ちゃんを『ろばの家』の住人にしたと目的格では書かれていない。ゆう子ちゃんがろばの家の住人になつたのは神の国の出来事であつて、人間の計画の結果ではないということが鮮やかに書き記されている。

イエスが群衆を養われたとき、一人一人は自分の持つている僅かなものでも、それをイエスの前に差し出したのだらう。その結果すべての人々は豊かに食事をすることができるようになつた。神の国は人間が生きて行くために握りしめていた所有を放棄するという転換を起させる。日本での飽食の生活を捨ててミンダナオに生きる人がいる。家庭を持たない子供たちが家庭の中で生活できるように自分の生活を転換する人がいる。新しい場所での神の国の福音に生きようとする人がいる。今の時代にも、やはり神の国の福音は出来事となる。この出来事に参加することは幸いだ。

羽生伝道所開設決議まで

阿蘇 敏文

一、経過

八六年の三月ごろ、百人町教会出身で東京足立区の北千住教会牧師、野毛一起さんから電話で今年度で北千住教会を辞めて開拓伝道に出たいと相談を受けた。本人が決意していたので支援する旨伝えた。

野毛さんは教団の囑託として事務所に行つて生活を支えていた。靖国委員会の仕事をすゝる中で委員であり、教団の常議員の小田原紀雄氏と出会い、開拓伝道の話に及び、小田原さんが住んでいる埼玉県羽生市に安価な土地もあり、小田原さんも一緒に開拓伝道を始める決意をする。土地は小田原さんが10数年羽生市に生活している関係で紹介された。この羽生市は人口約五万であるが教団の教会はない。

この羽生伝道所開設に当り、初めは親教会群を構成して支援体勢を組織しようと野毛、小田原さんの人脈の牧師たち数人で相談していた。しかし、親教会群では伝道所開設申請上、困難であると判断した。

六月に百人町教会の礼拝説教に来た野毛さんが開拓伝道の希望を語り、礼拝後の役員会で具体的な相談をした。その段階での説明に多くの人たちが不安を抱いた。特に、野毛さん家族の生活のことだった。また、開拓伝道の夢は未だ夢の段階のようだった。

十一月に入り、土地の購入の経済的な話が急進展して来たので百人町教会で臨時総会を

開催することになった。その段階で、百人町教会が親教会となること及び野毛さんを八七年四月一日から担任教師として招聘し羽生に派遣する、という議題だった。百人町の会員にとって全く急な開拓伝道所開設の話となった。普通なら開拓伝道のために長期間祈り、献金を蓄えて十二分の計画をもって始める。或いは、親教会から家庭集会なり、又、会員が現地に住んで中心になって準備を進めるというのが一つのスタイルである。ところが、今回、出身教職の野毛さんが決意し、小田原さん家族と力と祈りを合わせて始めると決意した。その野毛さんから母教会に支援が求められた。これに答えようとするのみならず、百人町教会が親教会として、自分たちが開拓伝道をするのと同じ決意をしようと臨時総会を開催した。

二、臨時総会

出席者三十名、委任十二名。礼拝に引き続いて懇談会の形式で二時まで話し合い、二時から四時十分まで総会を開催。結論を先に書けば、一名の保留者があったが、全員賛成の決議。懇談会及び総会には野毛さんも参加して説明、釈明や要請をした。

さて、その総会には次のような意見が出たので順不同で紹介する。

★教団の囑託で週三日働き、更に生活のために塾の教師などした場合、羽生での伝道活動に支障はないだろうか。

★百人町の内部で礼拝のことや青年のことなど、もつとしっかりしなければならぬものがある時、外に向って行けば結果は歴史の示すところ、分裂などになる危険性はないか心配だ。

★どれだけの経済的支援をしなければならぬかを考えると百人町教会の現状では精一杯のところがあるので、余り無理しない方がよいし、ゆっくりみんなが歩調を合わせられるような形で支援がいいと思う。

★百人町教会が果して、百人町教会として開拓伝道ができる状態であるうか、私はできないのではないかと思う。

★全面的に支援したい。

★応援したいし、何をすればよいかと考えながらみんなの議論を聞いていました。今、自分のできることはお金を出すことくらいです。共に苦しみ、共に祈ることをどうすればできるか考えてみたい。

★韓国の開拓伝道は建物とか土地とかが先決問題ではなく、伝道者がそこに住み、人間関係を築いていくような活動が先だと思ふ。しかし、百人町教会の開拓伝道のことを聞いて自分も一緒にワクワクしている。本当にうれしいことだと思ふ。

★今朝、四人目の新しい命の誕生を迎え、六人家族で開拓伝道に向う野毛さんを全面的に応援したいと思ふ。頑張つて下さい。

★百人町教会は自分たちで建物(会堂)をもっていない教会だが、仲間たちを信頼して支援をたくさんしてきた教会である。野毛さんを仲間として支援していきたいと思う。

★開拓伝道の話聞いて、とても爽やかな気分だった。

★百人町教会というのは、色々な話や問題を持ち込める教会として、いい教会だと思ふています。先には、ろばの家の話があり、今度開拓伝道、受けとめ、答えられる教会であると思ふ。

★野毛牧師のことは余り存知上げませんが、

書いたものを通して、私はとても気に入っているのです。その野毛牧師がするのです。支援したいと思っています。

★牧師というのは開拓伝道をしたがる者である。父が開拓伝道をした時、貧しかったと思うが、しかし当時、みんなが貧しかったのだが、実に明るかったです。誰れも礼拝に来ない時など、その時長屋に住んでいたので壁の隣りの住人に向かって大声で説教していた父の姿を思い出します。生玉子一個を五人の子供にティースプーンで「これが生玉子ですよ」と父がくれたことを今でも懐しく覚えてはいます。貧しかったと思うが決して、みじめではなかった。父は、最後に、また開拓伝道を始めたいと言っています。私は牧師の家庭に育って皆さんに支えられて大きくなったので、今度はお返しをするつもりで支援したい。

★約二十年の教会生活になりますが、開拓伝道に関わるのはこれが始めてです。心配していましたが、みなさんの意見や祈りの気持ちに教えられるところがたくさんありました。

★自分は何か始めるとき、失敗しないように万全を期して始める。失敗したときのことも考えておいて欲しい。

★私としては、是非、野毛さんを応援したいと思います。

以上のような個別の意見や感想の他に「今日の状況の中で新たな開拓伝道の任に当られる野毛氏に神の豊かな恵みと励ましとがありますように祈っております。僅かですが献金を同封します」と委任状と共に送って来た人も居た。帰りの自動車の中で姉妹教会からの留学生趙容来さんが「百人町教会は生きてい

ますね。蚕室教会に帰ったら今日の総会の様子を是非、話して聞かせたい気持ちに駆られました」と話していたことに百人町教会の姿を見ることが出来る。総会では、全員が発言して、先に書いたような批判も注文も賛成もあった。会員、非会員の区別なく平等に、自由に参加してもらった。

結局、百人町教会が親教会としての信仰の決断をするために今後、更に祈りを深めて、長期的な支援体勢を作らなければならぬこと、また、野生伝道所開設を責任をもって始めようとした野毛、小田原さんを中心に、また彼らを支援しようとした方々の主体性を重じなければならぬ。

三、まとめ

総会席上、野毛さんが「自分の教会形成の原型は百人町教会にある。野生で新しい教会の形成をして野生から百人町に何か貢献できればと思っている。それによって百人町教会が力を得られるように」という主旨のことを言った。何と素晴らしいことか。百人町教会は親教会として支援、応援、助言、心配をして、時にブレーキを掛けることを考えていた者に、野生が百人町の何かの役に立ち、相互に対等に対話の出来る教会形成を目指していただける。何とありがたいことか。本当に対話の出来る信仰共同体が少ない今日の時代、神さまからの大きな恵み以外のなにもでもない。それにしても百人町教会は経済的にどれだけの支援が出来るかの数字を明確にすることなく、宣教の業を始めることに祈りをもって参加を決議した。具体的な数字は新年度の予算を計上するときによく考えることにした。

一九七〇年、美竹教会の当時の平野保牧師を批判して出た小さなグループが、これまで七人の牧師を送り出し、今度は開拓伝道を始める。そして、この開拓伝道を心から喜んでくれたのが姉妹教会であったことに、百人町教会は幾重にも神に感謝しよう。その姉妹教会の牧師がクリスマスに送って下さったメッセージを紹介して終る。

「クリスマスおめでとうございます。キリストの誕生の意味を改めて覚えて覚えつつ、百人町教会とみなさまに神様のみ恵みが豊かにあふれますようにお祈り致します。今年は何教会が二年振りに合同修養会を開くことができ、何よりも感謝しております。この間、阿蘇先生より野生での開拓伝道のことを聞き、心から熱く応援しておりますが、我が教会でも来年から労働者のための開拓伝道を始めようことを決定しました。未だ場所などは決めておりませんが、現在我が教会の副牧師であるウォンズン氏を派遣することにしました。姉妹教会である両教会が同じ時期に同一の目標と使命に目を向けていくのは、僅かならぬ神様のみわざでありましょう。小教会なので、とてもない話だと言うのではなく、だからこそお互いに微力を合わせ、み旨に従うことは、何と素晴らしいことか、さらに両教会が共に歩んで行くことができ、何て心強いことかわかりません。共に祈り、共に励みつついきましょ。」

(趙容来訳)

△羽生通信1▽

伝道所開設こころ構え

野毛 一起

昨年の十一月の百人町教会の臨時総会で、羽生伝道所の設立と活動を親教会として援助して下さることを決定する折りに、ひとりひとりから意見や励ましをいただきました。その時、ひとつひとつの言葉を聞きながら、ぼくはこころの深いところから癒されていくような気持ちでいっぱいでした。

いや何もそれまでぼくが傷ついていたというようなことが言いたいではなく、教会というものが必然的に方位しているのは△癒し▽なのだとすることを、その時はじめて確認できたことの得も言われぬ感動でありました。これならやれる、ぼくらにはこれほどまっすぐに人のこころに入り込んでいく△言葉▽があるじゃないか。そんなふうに思ったことでした。

△まっすぐな福音▽ということを考えました。あれこれと脇目を振らずにただひたすらイエスの△みあと▽を辿ること、ぼくはこのことの過激な意味あいに、勇気をもってかけていく決心をしました。もちろん、この△賭け▽には勝つつもりです。イエスがこけてもぼくはこけない。イエスが死んでも、ぼくは死なない。なぜなら△復活▽というのはそういうことだったからです。

だから、ぼくらは決してイエスの△みあと▽に先んじて歩むつもりはありません。ただま

っすぐにその△みあと▽を辿ること以上の熱心も、それ以下の墮落も無縁でありたいと願うのです。誰にも負けないくらいに聖書を読み、誰にも負けない死なない体を持ち、ひとびとの間を駆け巡り、そこで聞こえてくる音や声に、ぼくは耳を傾けたいのです。「ああ、ここにも主はいらしておられたのか」

癒し癒される現場があるとしたら、そういうことでありましょう。イエスがガリラヤの村々や見棄てられたひとびとの間を訪ね歩かれたように、この現場に立つこと以外に、教会の宣教としての課題はないように思います。このことをぼくは以前から、△ガリラヤの磁場▽としての教会形成という言葉で考えてきたのでした。

百人町教会の臨時総会の折り、ぼくが考えていたことは以上のようなことですが、それが具体化されるには、世の嵐でかき消されそうなイエスの足跡を何度も何度も確かめて進んでいかねばならないでしょう。そんな時、ぼくは百人町教会のみなさんを頼もしく思っています。時には前になり後になり、また横に並びして、嵐の中を同じ道を辿る群れの息づかいを聞き取ることができからです。百人町教会が羽生伝道所の△親教会▽であることの意味を、ぼくはそう受けとめています。

それから、もうひとつ別なことですが、先日、伝道所開設の手続きをしていて感じたことも書いておきたいと思います。ぼく自身の課題として、今回何を抱えているのかの説明として。

百科辞典二冊ぶんぐらゐの厚みになるよう

な書類を作成したり、それを持って相談にかけたり、0が000000と並ぶような数字を借用書に書き込んだり、いろいろなことをやってきたのですが、そのなかで「開拓伝道」というのはこういうところから始まるのだなあと深い感慨を覚えました。特に煩瑣な手続きのことよりも、それに関連してたくさんの人に会い、「これから始めます。よろしく願います」と挨拶して歩いたことのみなで。

頭を下げてまわることは当然ですし、覚悟もきめていました。あれこれと心配してくださる人もたくさんいて、それは楽しいことでもありました。ですが、なかには、おまえのような△かけだし牧師▽に会って話している暇はないというようなことをあからさまに言葉にする人もいて、やはり全体としてぼくには目の眩むような気持ちになる世界でした。それでも、これこそぼくの身を置いてきたキリスト教の世界なのだとあらためて認識し、もうここから逃げも隠れもせずやっていくだけなのだ、身の引き締まる思いもしたのでした。

ぼくはなにも人に頭をさげるのが嫌だったわけではありません。考えてみれば、ぼくは商売人の家に生まれ、両親の△み手△をしべこべこ頭をさげてまわる様を見て育ちました。別にそれを恥ずかしく思ったことはありませんでした。

ただ、ぼくが結果的にそこから逃げ出すような形でキリスト教の世界に入ってきたのは考え違いでした。ペコペコ頭をさげるのはい

いですが、もう一方でわしらは魂まで売り渡したわけじゃないぞというような愚痴を時々もらしたり、また特に商売に不向きな性格をしている父のぎくしゃくしたお辞儀が、なんともぼくの目には憐れに映ったということがあったかもしれません。だからぼくにはその世界からできるだけ遠いところにいたいという気持ちがいっしょか芽生えていたのでしょう。逃げ出しても行っても、そこもまた同じ世界なのだということを全く知らずに、ぼくは母の「こんな宿命的な商人の家の血を清めるためには、家のなかからだれかひとりとくらい宗教家がでたほうがええ」という言葉を軽蔑しながらも、母の望むとおりに逃げ出していったのでした。

おもに反天皇制・反靖国の視点から宗教批判のテーマにこだわってきたのですが、この頃思うに、それにはもうひとつの隠れたテーマがあったともいえるのです。母が「猥雑な家」というふうに考えて忌み厭った世界とキリスト教世界の間にいったいどれほどの違いがあるというのだ。たしかにぼくのキリスト教批判の質にはそういうものもあつたように感じます。

もつとも最近ではそんなことも批判的を得ていないと思うようになってきました。ただ、批判というものの意味と、どこから批判しているのかの位置に考えの及ばない人たちには、一切の批判を敵の攻撃のように思い、さらに自分たちの理想や神を冒瀆するものであるかのように言い散らし、自分たちは身内意識にこりかたまつて批判者を排除しようとする

躍起になることがあります。そういう人たちには、あんた方だつて大したことやってないんだよ、と言つてあげる必要もあるのですが、それは概して殴り合いになつてしまふ類の議論です。

殴り合いの他にやれることが、またキリスト教の中には残つてあるんじゃないだろうか。そんなことを最近、思いを同じくする仲間を得て考えるようになりました。そのことは、一層ぼくらの批判の質を磨き、批判の位置を明らかにすることもあります。

とにかく、ぼくとしてはいまこの時に、なぜキリスト教なのか(イエス・キリストの福音につき動かされるといふのと違う概念枠を持つた問題として)、またなぜ牧師なのかといふことについてもあらためて明確にしていく必要があると考えています。教団はもうだめだ、キリスト教もだめなんだという表層での批判はよく耳にしますが、それをまるで他人事のように嬉しい顔をしていつてみたり、だめな中には自分や自分の教会がはいつていなかったりするような批判はみつともないことです。

再びよく考えてみれば、そもそもぼくの宗教としてのキリスト教に対するあの批判の方向性から「開拓伝道」というものが出てきたことと自身が、目の眩むようなことなのかもしれない。しかし、それによつてぼくは批判の矛先を変えたり、手を緩めたりするつもりはないのです。ぼくがどこに立つてもものを言っているのかを明らかにしたりえで、ぼくの批判がまた自分の身を斬るものでもあること

を勇気をもつて引き受けたいと思います。この極めて八古風なV問題意識を支えてくださる人たちに助けられながら。

こういうことを書いてみると、マルコ福音書がパリサイを斬り批判した同じ刃で、教会の権威としての「十二弟子」を斬りつけたことを思い浮かべます。キリスト教の中心に対して、「おまえらだつてパリサイと同じ穴のムジナじゃないか」と罵つたことをです。身内意識にこりかたまつて、他人事のようにパリサイを批判することはいくらでも可能だったなかで、このマルコのパリサイ批判の質が同時にキリスト教の身を斬るものであつたことを、ぼくは高く評価したいと思うのです。パリサイの踏み外していつた課題が同時にキリスト教にとつても同様の過ちの可能性をもつていたという認識でしょう。

ぼくがかつてそこから逃げようとした猥雑な世界観にキリスト教もまたどつぶり浸つていることへの批判だけではなく、さらにそれを超えていくことのできる地平を切り拓きたい。ほんとうにキリスト教がだめならだめでもいい。それでもその宗教自体が八回心Vしうるような場を形成できないとしたら、ぼくにはこれから先にはもう進めないだろうと思ふのです。

羽生伝道所開設にあつたのへこころ構えVを多少大げさに書いてみました。もちろんこんな大きな課題はひとりでは担えるわけがなく、大勢の人の力が必要です。ぼくはそのために畑の土や鶏糞にまみれて、あれこれと祈り求める日々を送ることになりそうです。

家庭集会
12月テキスト

マルーシャ

中林 庫子著
立風 書房

マルーシャノチョーチャノと名を呼んで、別れてから三十数年過ぎた今も夢の中でシベリヤの凍土を吹雪になぶられて捜しもとめる「私」。「私」は一九三九年夫の赴任にともない満州に渡った。その満州の哈爾濱からさらに山奥に入った横道河子(はなぢがし)はロシア革命から逃がれた白系ロシア人の亡命暮しの地であった。そこで出遭ったマルーシャ。白痴といわれ俱樂部の水汲みをしていた彼女が卑劣な言葉で中国人ボーイたちに罵られるのにいたたまれず「私」はマルーシャをひきとる決意をする。彼女は白痴ではないかもしれないという思いに衝きあげられて。ロシア人女中チョーチャと共に彼女の瘰癧の指を治し、襤褸の黒衣を抜がせることから始った生活の中で次第に彼女は言葉を覚え、記憶をとり戻していく。折しも復活祭の日、「私」はマルーシャの甦りを確信する。人々が猫柳の枝を手折りイコンの祭壇に献げるその日、マルーシャの心はその銀の芽のように芽吹いていた。恋、そして結婚。その間に語られる彼女の地獄の半生。それからまもなく敗戦をむかえることとなり、「私」は追われて日本に帰る。これがこの本のあらすじである。

わたしは思わずにいられなかつた。もし、「私」がわたしだったらと。わたしならマルーシャをひきとつただろうか。国を奪われても誇りは失わない人々に出遭えただろうか。

この本は伝えてくれる、ひとが真摯に生きるとは何であるかを、真摯に生きる時何が生まれるかを、信じて生きる喜びを。

男たちは戦闘を語った。女たちは何を語ってきたか。このひとりの若い女は子育てをしながらあの戦中を満州で生きた。その暮しを人との出遭いを手にとつてみるように、鮮かに細やかに再現してみせてくれただけのようであるのに、それは歴史を戦争を語つてやまない。著者は言っている、このときを生きたいという切実さより、そこに曝されていた自分というものの裏側で、真実は隠されて動いていった、というそれがずしりとこたえる。私たちは中国という他の国を侵した。私も現実には横道河子という中国の土地にいた。それはやはり侵したということである。(しかし同時に)：ほかならぬ祖国日本によつて私たちは轢き殺されたのであつた。でもやはり、声をあまり大きくしていうのはやめよう。低級な者たちなら轢き殺されてもしかたがないではないかと、ごくしぜんに信じているひただつてなかにはおおぜいあるだろうから。しかし「中国残留孤児」といわれるひとたちの、白いものまじりはじめた頭髮が物語っている、自明のものを、忘れてはならないだろう。ロシア革命もマルーシャという孤児をうんだけれど。多くの人たちにこの本を薦めたいと思う。そして共に感銘をそれだけに終らせない道を歩んでいきたいと思う。

(神崎 恭子)

ろばのせなか

▼「今朝は冷たいですね。バスは遅れてますよ。……私は今年で71才になります。27年間働いた病院を11年前にやめまして、娘がこんどは働きに出たんです。二人の孫のことと、家事を全部やつてますから、おかげさまで、病気ひとつしないうですよ。」バス停で会つた婦人の話は、バスが来るまで続いた。今年から職場を去り、昼間バスを利用することが多く、バス停できまつて中年以上の婦人から話しかけられ、その方々の生活の一端を伺うことがある。多分二度はお会いすることはない方々である。何気ない立ち話であるがお互いに知らぬ顔でバスを待つよりも心がなごんでくる。雪の日や寒い日はまた一段と。

▼羽生市がどんな場所か私は未だ知らない。けれど、野毛さん達の夢が形となつて創造されるとき、私の羽生への想像もまた拡がっていく。高瀬夫妻が「ろばの家」のことを話した時、私たちも共に夢をみた。そして一年が経ち、四人の子ども達は様々なものを私たちに与えてくれている。神さまは時々、夢に参加するチャンスをお私たちに与えて下さる。人と人が出会うことも、人と時(機会)が出会うことも偶然かもしれない。けれど、やっぱり偶然ではなく、必然がそこにあると思う。求め、祈り、選んで自分の人生を真剣に生きているから夢がみられるのではないだろうか。その夢にほんの少し、私たちも参加したいと思う。新しい年のはじまり、この一年がよい年でありますように。 いまさとみよこ